

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年3月31日現在

機関番号：34304

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2011

課題番号：22653047

研究課題名（和文） ロシアにおける芸術団体のグローバル・パートナーシップに関する研究

研究課題名（英文） Global partnership of performing arts organization in Russia

研究代表者

大木 裕子 (OKI YUKO)

京都産業大学・経営学部・准教授

研究者番号：80350685

研究成果の概要（和文）：ロシアの芸術団体の中で、特にバレエに着目しその国際的な貢献について文献資料、ヒアリング調査より研究成果を研究論文としてまとめ、大学紀要に掲載した。さらにこの研究をおこなったことで、国際的な舞台芸術団体としてバレエ・リュスの貢献についての重要性が指摘され、今後の新たな研究課題を見出すことにつながった。

研究成果の概要（英文）：The global partnership of Russian ballet organizations were especially focused in the project. In add to collecting all the possible published books and papers, plenty of interviews were conducted to whom concerned. As a result, one research paper about the history of Russian ballet could have been published in the university journal and also new research theme which is about the valuation of Ballet Russe as a global performing company was discovered.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	0	1,100,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,200,000	330,000	2,530,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経営学・経営学

キーワード：バレエ、グローバル戦略、ロシア、バレエ・リュス、ワガノワメソッド

1. 研究開始当初の背景

ロシアの舞台芸術団体の上演水準の高さは、旧ソビエト連邦が置かれていた社会主義国家の下で芸術産業を「戦略産業」と位置付け、国家管理を強化してきたことによる。しかし90年代のソ連邦崩壊の前後の社会・経済の混乱の中で、優秀なアーティストが国外に流出し、ロシアの芸術団体の水準は著しく低下し不振が続いてきた。ようやく2000年代になっ

てロシアの有力芸術家らが中心となって芸術団体の復興が図られるようになった。そこでは国外との提携によるグローバル・パートナーシップが、ロシアの芸術団体の成長に不可欠な経営要素となっている。これまで芸術分野の経営学研究においては、主たる研究対象は欧米先進国であり、潜在的な成長能力を持つ研究対象国としてアジアが注目を集めているが、従来、ロシアの芸

術団体についてはその実態が分析されてこなかった。しかし、ロシアの芸術資源の活用及び日本とロシアの芸術団体との連携は、国際競争力の向上を目指す日本にとって、次世代の芸術創造のために重要な経営研究テーマのひとつになると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ロシアの芸術団体と海外芸術団体との連携パターンを分析し、特に日本との連携に焦点を当てながらロシアの芸術団体の国際戦略をモデル化することにある。研究代表者は、これまで技術経営の分野での企業経営の国際比較研究をおこなってきた。特に最近では国際提携により創出されるイノベーションのダイナミックケイパビリティの研究を蓄積してきた。本研究では特にロシアで国際的な競争優位を自負するバレエ団にウェイトを置き、そのグローバルな展開を把握する。

本萌芽研究では、2 ヶ年計画で本研究の土台となる基礎的調査を行う。研究で明らかにするのは以下の4点である。

第1に、グローバル・パートナーシップの体系化が必要になる。これまでの国際的連携モデルのパターンを発見し、その戦略的意図を整理する。第2に、グローバル・パートナーシップの構成概念を整理し、概念的枠組を構築する。戦略的提携の多様な側面が測定されるよう概念の操作化を行い、分析フレームワークとする。第3に、構築された分析フレームワークに基づき、ロシア芸術団体のグローバル・パートナーシップのダイナミズムについて、歴史的及び現在の実態を測定、記述、比較、分析する。研究に際しては、少数の事例を対象とした詳細な定性的研究を行う。この事例研究を通じて、ロシアにおける国際的提携の普遍的な諸変数を抽出し、仮説命題を導入する。

事例研究から得られた萌芽研究の分析は、本研究においてロシア芸術団体のグローバル・パートナーシップのダイナミズムに関する統合的な理論モデルを構築する礎となると共に、日本企業にとって持続的競争優位を実現するための具体的な方策を提示することにつながる。

本研究における学術的特色は、経営学の分野では殆ど研究対象とならなかったロシア芸術団体の国際戦略の実態を具体的に定

義・測定し、国際的提携のモデルの類型を実証的に導出する点である。本研究は経営学においては新分野に位置づけられるものであり、これまでの実践的課題と事実を体系化し、理論構築を目指すものである。これまで、ロシアは専ら経済イデオロギーの観点から研究対象になることが多く、軍事産業からソフト産業への移行という社会構造の変化を前提とした経営戦略の網羅的な研究は見られない。従って、体系的な理論の構築には実証的研究を積み重ねていく必要がある。理論構築を目指した本研究は、先駆的実証研究として位置づけられる。

3. 研究の方法

本研究は、単独でこれまで行ってきた諸研究をさらに発展させるもので具体的には、まず、先行研究、1次資料（インタビュー調査や内部資料の渉猟等）、2次資料（各種統計資料等）の広範な探索により理論的な分析枠組を構築した。その分析枠組に即して、少数の事例を対象とする詳細な定性的研究をおこなった。

研究代表者の大木裕子は、芸術関連組織、伝統産業の技術提携により創出されるイノベーションに関する国際比較研究を蓄積してきた。今後のロシア芸術団体の世界進出は特に舞台芸術分野で躍進を遂げると思われるが、大木の過去の研究で発見した事実や知見は、海外進出及び国際提携によるロシア芸術団体の組織戦略のあり方に応用することができる。大木は、これまでの体系的な研究において、定量的、定性的研究に加え参与観察を併用してきた実績をもつ。本研究では研究統括を行うと共に、主に定性研究に従事した。

連携研究者の橋本英重は、17年に渡る国内外のメディア関連企業における実務経験により、国際提携戦略の構築、企業戦略の評価について独自の手法を確立してきた。近年では、メディア・ベンチャー企業の経営に従事すると共に、定性・定量両手法により、情報経営の体系的な研究を蓄積してきた。これらの研究は、本研究におけるロシア芸術団体についての経営戦略および国際提携戦略を評価する上で極めて重要な役割を果たす。本研究では、主に企業戦略の評価に従事した。

海外研究協力者のアン・スミスは、全米の文化政策、芸術マネジメント、ダンスに関する研究を蓄積しており、ロシア芸術団体がアメリカに与えた影響についての幅広い知識を有する。文化交流事業にも携わり、文化産業に関する体系的な理論の蓄積を行うと共に、アーティストを活用した芸術の成長と国際戦略に多大な貢献をしてきた。実務経験により蓄積してきた国際的な芸術関連情報は、世界市場を視野に入れダイナミックな展開を図るためにロシアの芸術団体に関心を持つ、或いはロシア芸術団体が興味を持つ世界の企業という双方向での国際戦略を把握する上で、ダイナミックな視点を提供することが可能である。また、スミスは芸術団体トップとの強力な人脈を持つことから、戦略的意思決定のキーパーソンへの定性研究を可能とする。本研究では主として定性的研究に従事すると共に、理論構築に従事した。

このように、本研究のメンバーは、それぞれの専門分野におけるこれまでの研究の蓄積を背景として、多面的に研究に取り組む。官民の提携に関する国際比較研究を行い、企業のインプロビゼーションによるダイナミックケイパビリティの形成過程についての考察を重ねてきた研究代表者、豊富な実務経験を持ちエネルギー企業の成長戦略、グローバル企業の経営革新という視点から研究に取り組んできた連携研究者、豊富な実務・学術経験を持つ海外研究協力者、これら三名のキャリアの異質性は、研究チームとしての知的変換を引き起こすことが期待されて構成した。

4. 研究成果

初年度は、ロシア芸術団体の実態について、制度的（政治、行政、法律、起業インフラなど）、技術的（ハイテク諸分野）、経済的（人口、市場など）、社会的（文化、イデオロギーの変化など）な事業環境条件との間でどのような適応的で発展的な成長を図ってきたのかを、ダイナミックに分析するために、関連する文献ならびに各種資料（1次資料および2次資料）を入手、渉猟することを主眼とした。また、これまでの研究を、それぞれの専門領域の立場から多面的にサーヴェイし、試論的分析枠組みを演繹的に導出した。

更に、資料収集と意見交換のため、海外の研究機関、研究者および実務家との交流

を行った。特にサンフランシスコにてバレエ事情に詳しいゴールデン・ゲート大学のアン・スミス教授には、広範な人脈を紹介していただき、欧米のバレエ団体の研究者との連携を図る準備をおこなうことができた。またパリのポリテクニクでは、ベンゴジ教授の協力を得て、フランスにおけるロシアのバレエ研究の第一人者パトリック・ジャーマン・トーマス教授を紹介していただいた。

ロシアの芸術団体の中で、初年度の研究中心と位置づけたバレエについては、バレエの歴史的背景について論文としてまとめ、今後の研究の土台となるように整理した。更に、ロシアのバレエについては、ワガノワメソッドについて映像や文献から研究を進め、アメリカにおける科学的管理法との関連性について、研究を進展させるために国内の研究者とのディスカッションを進めてきた。

次年度は、それまでにおこなってきたパイロット研究の結果を踏まえて、研究の分析枠組を完成させるように尽力した。年間を通じて、特に連携研究者、海外研究協力者との連携、情報交換を図り広範な知見を得ることに注力してきた。定性調査、国内外での資料収集により、ロシア芸術団体のグローバル・パートナーシップのダイナミズムについて、試論的な理論構築を行うために調査研究を遂行してきた。

具体的には、特にバレエ・リュスの活動が与えた国際的な影響に着目し、プロデューサーであったゲルギエフのマネジメントについての資料収集・情報収集が研究成果につながっている。また、ヨーロッパでのオペラやシルクドゥソレイユなど、ロシアの舞台芸術は国際的に多くの影響と貢献をもたらしていることが理解された。これを検証することで、ロシアの芸術団体の持つ特異性がもたらすグローバルな活動について、新たな研究課題を発見することができた。

なお、本萌芽研究での結果は、今後発展した研究へと継続することで、一層の精緻化を図ることを目指す。今回の研究で得た人脈を頼りとし、国内外の連携協力者、研究協力者との連携のもとで、国際的実務的視点から研究を推進していく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

①大木裕子、ロシアのバレエに関する一考察、
京都マネジメントレビュー、査読無、17 卷、
2010、27-48

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007860939>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大木 裕子 (OKI YUKO)

京都産業大学・経営学部・准教授

研究者番号：80350685

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

橋本 英重 (HASHIMOTO HIDESHIGE)

明星大学・経営学部・非常勤講師

研究者番号：40534491